2025 年 4 月 6 日 受難節第5主日礼拝メッセージ

「下に上る生き方？」　　牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 20章 20−28 節

「下に上る生き方」という言葉を、お聞きになったことはおありでしょうか。恐らく、ほとんどの方は初めて聞かれたのではないかと思います。普通、私たちは「山に登る」などと同じように、「上る」という言葉を、「上に向かって上がっていく、上っていく」という時に使います。また同じように下の方向に向かっては、「下っていく」「下がっていく」という言葉を用います。それにも拘らず、「下に上る」とはどういう意味でしょうか。

この言葉を最初に言い出したのは、誰かは分かりませんが、この言葉は「イエス・キリストの生涯、生き様を表している言葉です」ということで、私は耳にしたことを覚えています。イエス・キリストの姿、生き様を表現した賛歌というものは、聖書の中にもいくつも記されています。例えば、有名なものでは、新約聖書「フィリピの信徒への手紙」の「キリスト賛歌」があります。2 章 6 節〜9 節を、以前の新共同訳でお読みします。

> 「[6] キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、[7] かえって自分を無にして、僕(しもべ)の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、[8] へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。[9] このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました」

ここには明確に、「上と下」という上下関係が表現されています。そしてイエス様は、もともとは人間よりもずっと上にいる神様と同じ身分であったにも拘わらず、イエス様はあえて、下にいる人間、僕(しもべ)と同じ身分になってくださった。下へ下へと、へりくだって、その結果として、最も残虐な十字架刑で処刑されました。だからこそ、それだけ謙遜で、従順だったからこそ、イエス様は、復活後に再び天高くに挙げられて、あらゆる名に優る「キリスト（救い主）」という名を与えられた、というように読むことが出来ます。そして、そのような理解は、今回の聖書の箇所、イエス様の言葉にも通じていそうです。「マタイによる福音書」20 章の 25 節からです。

「[25] あなたがたも知っているように、諸民族の支配者たちはその上に君臨し、また、偉い人たちが権力を振るっている。[26] しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者となり、[27] あなたがたの中で頭(かしら)になりたい者は、皆の僕(しもべ)になりなさい。[28] 人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのと同じように」

この後、続く 21 章では、いよいよイエス様と弟子たちは、古代イスラエル国の都エルサレムへと入城して行きます。イエス様はそれまでにも自分がエルサレムで、祭司長や律法学者など、時の権力者たちによって、逮捕されて、処刑されることになるかもしれない、ということを度々、弟子たちに伝えていたにも拘わらず、弟子たちはそのことを理解せず、と言いますか、聞いても耳に入っておらず、「これでいよいよイエス様が新しい王様、支配者になって、ローマ帝国による支配から民を解放してくださる」と思い込んでいました。

だからこそ、20 節 21 節にあるように、ゼベダイの息子たちと、その母親がイエス様に対して「二人の息子が、あなたの御国(みくに)で、一人はあなたの右に、一人は左に座れるようにしてください」とお願いしたり、また 24 節にあるように、他の 10 人の弟子たちも、「ゼベダイの息子二人だけが、俺たちを差し置いて、何を勝手に抜け駆けしているんだ」と腹を立てたりしていました。イエス様が統治者、王様になったら、自分たちも重臣として取り立ててもらいたい、というような下心があったというわけです。ですが、イエス様は一同を呼び寄せて「[26] あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者となり、[27] あなたがたの中で頭(かしら)になりたい者は、皆の僕(しもべ)になりなさい。」と言われました。

「上の者が下になり、下の者が上になる」。また「先の者が後になり、後の者が先になる」とは、この箇所だけではなく、福音書の複数の箇所に出て来る神の国における、神様の価値基準です。ですが、「上に立ちたいなら、まず下になりなさい。偉くなりたいなら、まず仕えなさい」というのは、やっぱり「下心丸出し」と言いますか、何だか違うような気がしてしまいます。「上の者が下になり、下の者が上になる」。また「先の者が後になり、後の者が先になる」というのは、飽くまでも結果論であって、始めから目標として持っているべきものではないような気がしますが、

如何でしょうか。

なぜ「上に立ちたいなら、まず下になりなさい。偉くなりたいなら、まず仕えなさい」というような言葉が、イエス様の言葉として、聖書に記録されているかと言うと、そこにはやはり翻訳者の思い込みがあるのではないかと思います。つまり、言い換えると、イエス様が「『下に上る生き方』をされたのだから、私たちもイエス様に倣って『下に上る生き方』をすることが求められているはずだ」というような色眼鏡を通して、イエス様の言葉を読んでいるということです。そもそも、イエス様は「下に上る生き方」をされたのでしょうか。その点から、虚心坦懐に見直してみる必要がありそうです。

以前、どこかで聞いた話ですが、ふくよかな全身が金箔で光り輝き、蓮の華の上で穏やかな表情をしている仏像と、十字架の上にやせ細った身体が磔(はりつけ)にされて、手足と脇腹から血を流し、うなだれているキリスト像と、「どちらを神様として拝みたいか」と質問された時に、ある人が「苦しそうな姿のキリストよりも、明るく穏やかに微笑んでおられる仏様の方がいい。なんで、わざわざ痛そうで、苦しそうな神様を拝むのか」と答えたということです。もちろん、世界中には様々な姿の仏像があり、またキリスト像がありますので、一概に全ての仏像がふくよかな体つきで穏やかな表情をしているわけでもなければ、全てのキリスト像がみすぼらしくて全身傷だらけというわけでもありません。それでも、確かに「自分が拝む対象は、美しくあって欲しい。こんなにも醜い人間界よりも、崇高であって欲しい」というのは、ある意味、素朴な思いなのかもしれません。しかし、それではどうしても、救われない人がいる。光が明るすぎるために、暗闇から出ていくことが出来ず、自分と神との間に断絶を感じてしまう人がいる、のではないでしょうか。

芥川龍之介の小説『蜘蛛の糸』には、自分は雲の上の光り輝く天上界にて、そこから下界の人間界や地獄に蜘蛛の糸を垂らして、選ばれた特定の人だけを雲の上に引っ張り上げてくれる仏の姿が描かれています。ですが、イエス・キリストの姿は、そのようなものではありません。まずイエス様は、クリスマスにおけるその誕生場面から、人間の家で、親族やまわりの人々から歓迎されての出産ではありませんでした。人々からのけ者にされ、家畜小屋の片隅での出産を余儀なくされ、飼い葉桶の中に寝かされました。そして貧しい木工・石工職人として育ち、日々に食

い扶持を稼ぐ、糊口を凌ぐような苦しい生活を送っていました。そして公生涯の最期は、最も残虐で不名誉な十字架刑で殺されていきました。

このようにイエス様の生涯を振り返ってみると、ただの一度も人々の「上」に立ったことなどはなかったということが分かります。イエス様は、ずっと低みにあり続けました。そして、自らも苦しい生活の中にあったからこそ、全ての人の苦しみを、他人ごとではなく自分事のように感じずにはいられず、放っておけなかった。そのような感性の持ち主だったのだろうと思います。そしてその結果として、十字架での処刑後の３日目に死から引き起こされました。ですから、イエス様の生涯は「下に上る生き方」ではなく、むしろずっと「下にある生き方、低みにある生き方」でした。そのため、聖書の翻訳も「低みに降って」と訳するのではなく、「低みにあって」と訳す方が、相応しいのだろうと思います。

キリスト教の神、イエス・キリストはこの地上での私たちの重荷や悩み苦しみを消し去り、雲の上の天上界に引っ張り上げて下さる神ではありません。むしろ、一緒に重荷を負ってくれる神、共に喜び、共に涙してくれる「共感共苦」の神です。たとえ今、どんな暗がりにあっても、神から見放されたと感じ、絶望しかないと感じていても、それでも「あなたの隣に私はいる」「私もあなたと同じ苦しみを経験した」と言って下さり、「だから、あなたは独りではない」と一緒にいて支えて下さる神です。その神様が共にいて下さることを感じながら、私たちは今日もここから、新しい年度、新しい一週間へと送り出されて行きます。